

県内におけるトマト灰色かび病菌の薬剤感受性について

1 はじめに

トマト灰色かび病は葉や茎、果実に発生する病気です。果実に発生すると商品価値を失い、また茎では、そのまわりを取り巻くとそれより上の部分が枯死してしまうことから、経済的被害が大きい病害です(写真1)。生産現場で発生すると短時間で多くの胞子を形成することから、防除のために殺菌剤を短い間隔で繰り返し散布する必要があります。このため、薬剤耐性(薬剤の効果がない)を獲得しやすい菌として知られおり、各地で様々な殺菌剤に対する耐性菌が報告されています。そこで、今回は県内の生産者ほ場で発生しているトマト灰色かび病菌について薬剤感受性検定を行ったので、ご紹介します。

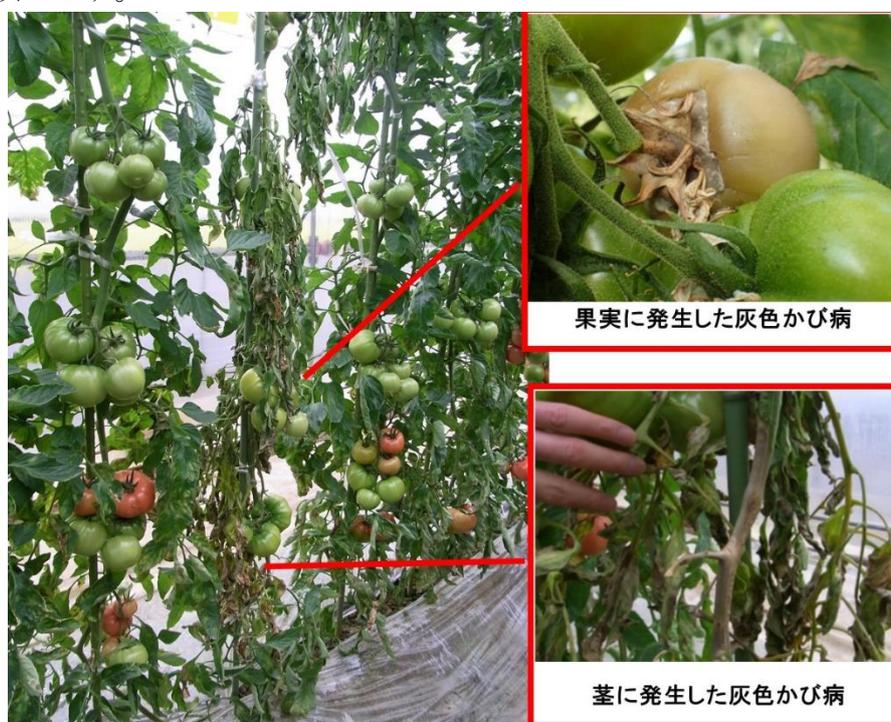


写真1. トマト灰色かび病の被害の様子

2 薬剤感受性の検定

県内のトマト生産者の栽培施設で発生している灰色かび病菌を採取し、生産現場で広く使われている5剤(表1:SDHI 剤及び QoI 剤)について薬剤感受性検定を実施しました。薬剤を添加した培地上で灰色かび病菌を生育させ、その菌糸生育量を薬剤無添加の場合と比較して耐性の程度を決定します。(写真2)

合計で113菌株を検定した結果、供試薬剤の中には、薬剤添加培地上でも菌糸の生育が認められ、耐性菌と疑われる結果もありました。

表1. 薬剤感受性検定を実施した殺菌剤

殺菌剤分類番号 (Fracコード)	薬剤のグループ	今回用いた殺菌剤
7	SDHI剤 (コハク酸脱水素酵素阻害剤)	A剤、B剤、C剤
11	QoI殺菌剤	D剤、E剤

注) いずれも呼吸を阻害する薬剤ですが、RACコード7と11では作用点が異なります。
同じ番号であっても効果の出方に違いがあることが知られています。

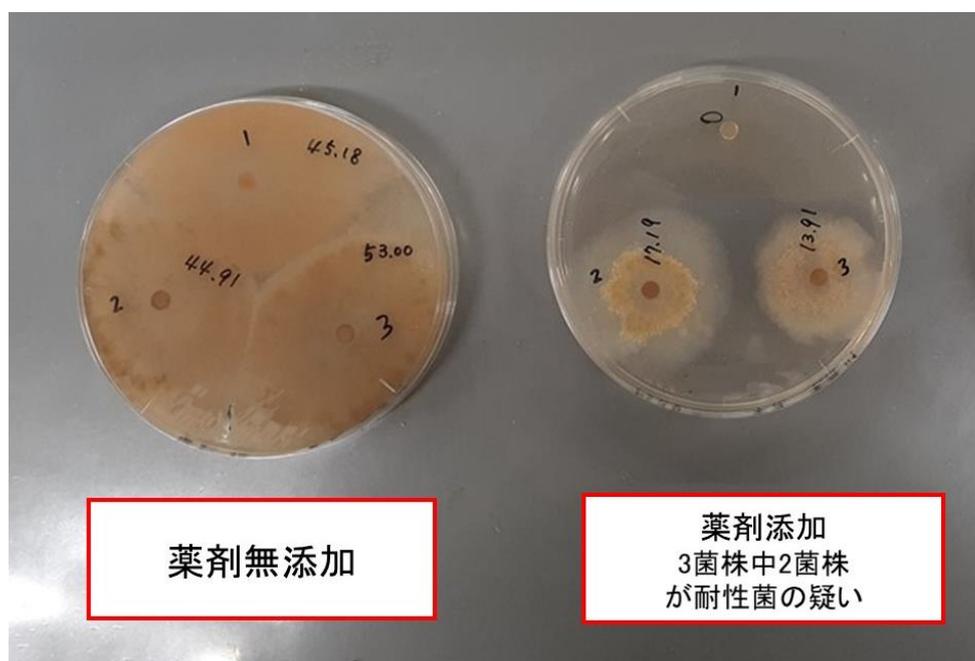


写真2. 薬剤感受性検定の様子（薬剤散布時の濃度に相当）

3 今後の対応

SDHI 剤及び QoI 剤については耐性菌の発生しやすさが中～高リスクと評価されているため、他の分類の薬剤を含め、連用や多用を避けた農薬の散布を心がける必要があります。また、多発してしまうと防除が難しくなるので発生前の農薬散布を心がけてください。今後、耐性菌の疑いがある菌株について、植物体上での防除効果の検証を進めていきます。

【問い合わせ先】埼玉県農業技術研究センター

病害虫研究担当 電話:048-536-0409

FAX:048-536-0318